

Education USA Leadership Institute, Campus Internationalizations: Student Mobility に関する報告 ～米国大学の国際化への取り組み： University of Illinois Urbana-Champaign による事例～

教育交流部門・工学研究科国際交流室

西山 聖久

1. はじめに

本稿は、2015年7月末～8月初旬に開催された米国国務省による研修、Education USA Leadership Institute, Campus Internationalizations: Student Mobilityにて紹介されたUniversity of Illinois Urbana-Champaign（以下 UIUC）の国際化への取り組み事例を報告する事を目的とする。

UIUC はアメリカの超名門大学の一つでありミシガン州に広大なキャンパスを有する。現在、約44000人の学生が学んでおり、その内約10000人が留学生という大変国際色豊かな環境である。（留学生のうち約半数が中国人と最も多く、以下、韓国人、インド人と続く。）研修では、UIUCのこれらの留学生が実践している充実した様々な支援活動を中心に、貴重な経験を積む事が出来た。

筆者の知る限り、日本の大学の国際化を論ずる際に特に重視されているのは、異文化理解教育、英語教育の充実や留学生や外国人教員の増加である。一方、米国の大学における使用言語はもともと英語であり、教職員学生共に多様なバックグラウンドを持つ者が集まる場としては極めて長い歴史を持つ。そのような米国の大学における国際化への取り組みにおける知見は、名古屋大学（以下本学）を始めとした日本国内の大学が、国際化を目指すに当たり今後直面する問題の解決への鍵が含まれている事であろう。

2. Education USA Leadership Instituteについて

筆者が参加した研修プログラム、Education USA Leadership Institute（以下 ELI）は、Institute of International Education（IIE）により企画・運営された。

IIE は Department of State（米国国務省）内組織の一つであり、グローバル化時代に活躍できる人材育成に関する多数の事業を担う。筆者が参加した研修の内容は、オンラインによる2回の Pre-departure Virtual Training, 10日間の Academic Residency, 2日間の Closing Program, 2回の Follow-on Virtual Training により構成された。ELI が直接主催した Washington DC での Closing Program 以外は、UIUC の国際化推進を目的とした Illinoi International を構成する組織の一つである Global Education Training（GET）の主導により企画・実施された。参加者は、中国人1名、日本人4名、ボリビア人1名、エクアドル人1名、ウクライナ人3名、カザフスタン人3名、ジャマイカ人1名の計14名と国際色豊かなメンバーであった。本学からは二名が参加した。

筆者らが参加した Education USA Leadership Institute の 題 目 は、Campus Internationalizations: Student Mobility（留学生の受け入れや留学の促進によるキャンパスの国際化）であった。その目的は、

- 1) アメリカの高等教育組織の理解を深める
- 2) 留学生支援・留学支援に関するベストプラクティスを共有する
- 3) UIUC のキャンパスの国際化業務の専門家とのネットワークを構築する
- 4) 参加者各自が研修プログラムで習得した成果を再確認する
- 5) 参加者の各々が派遣元の機関で研修にて学んだことを定着させる

とされた。筆者らが参加した UIUC での研修と同時に、別の機関により企画された研修が開催されており、Closing Program にて各グループが成果を共有する運びとなっていた。

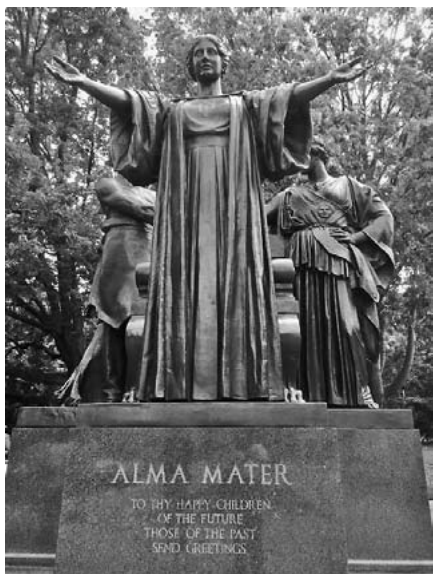


写真1 UIUC キャンパス内にて (1)



写真2 UIUC キャンパス内にて (2)

3. 留学生支援に関して

UIUC での研修最初のトピックは、留学生支援に関する紹介であった。UIUC は留学生支援を目的として渡米前オリエンテーション、渡米後オリエンテーション、その他キャリア支援等のサポートを行っている。また、定期的なアンケートの実施とその分析を徹底することにより、これら支援の質の向上に努めている。

3. 1 オリエンテーション

研修では、まず、新入生向けのオリエンテーションやアンケート調査、キャリア支援等の種々の学生向け

サービスに関する説明を一通り受けた。その後、渡米前オリエンテーションやその後の登録手続き、渡米後のオリエンテーションを、参加者が UIUC の新入留学生として一連の流れを模擬的に体験した。

渡米前オリエンテーションは、大学の専門職員が留学生の多数を占める中国、韓国の主要都市に直接向かって開催している。同オリエンテーションでは、在留資格を得るためのプロセスやビザの説明、米国への入国審査の様子（長蛇の列が出来ており数時間待たされることも良くある等）に加え、飛行場から大学への交通手段、到着後の必要な登録手続き、渡米後にもオリエンテーションが開催される事等、留学生が無事に UIUC に到着し、留学生としての責任を理解した上で生活をスムーズに開始する為の必要情報を詳細に説明している。また、同オリエンテーションでは早い段階から UIUC の留学生サポートのレベルの高さを示す効果も得られているという。

留学生は渡米後、International Student and Scholar services (ISSS) に赴き登録を行う事になっている。そこでは、留学生の登録情報と政府のデータベースの照合が行われると共に、学内の種々のサービスに関する資料を入手する事が出来る。

渡米後のオリエンテーションでは、主に Academic Expectation, Welcome appointment, Health and safety についての説明がなされる。Academic Expectations は、学生が学位を取得する為に気に留めておくべき事項である。特に、留学生は積極的にアメリカ人の学生とふれあい、英語力の向上に努め、相互に国



写真3 UIUC スタッフによる模擬オリエンテーションの様子



写真4 ISSSの見学

際感覚に磨く事に貢献する事が推奨される等が強調される。また、学位取得の為に必要な単位の取得条件に加え、その他、セミナー、インターンシップ等、留学等の様々なスキルアップの為の機会がいかに学内で得られるかも紹介される。課題の提出期限を守る必要性、不正行為等に対する罰則規定などもここで明確に説明される。Welcome appointmentでは希望する新入留学生に対し、マンツーマンの相談窓口を開いて対応している。そのようなサービスが存在している事はオリエンテーションやE-mailにて通知しているという。Health and safetyでは、入会すべき保険に関する説明や病気になる場合の備え、Health Centreの場所に関する説明がなされる。特にSafetyに関しては、学内にはPolice Departmentが存在しており、身に危険が及んだ際に押せばすぐに警備員が駆けつけてくれるボタンが各所に設置されている事、各種ハラスメントへの大学の対応体制を説明する。

3. 2 アンケート調査について

UIUCでは、定期的に留学生を対象にアンケート調査を行い、留学生全体の2割に当たる約3000人の回答が得られているとの事であった。質問事項は多岐に渡り、留学生のバックグラウンド、到着前サポート、到着後のオリエンテーション、学業や生活の満足度、将来の計画等に関する内容である。様々な項目に関する満足度を質的、量的に調査しており大学のサービス向上につなげており、このアンケート調査の結果に基づき、学生同士のサポート体制の充実、学内シャトルバスの設置や渡米前オリエンテーションの内容改善に生かされた事例もあるという。

4. その他の留学生支援について

UIUCでは上述の留学生支援の他に、集中英語講座やキャリアサポート等のサービスも提供されており、それらの担当者とも深い議論を行う機会を得ることが出来た。その中で特に重要であると思われる内容を以下に説明する。

4. 1 UIUCのキャリアサポートについて

上述した通り、UIUCの留学生の国籍は多岐に渡る。当然彼らにとっては世界中が就職先であるという点に於いて、日本の大学における現在の就職事情と大きく異なるであろう。しかし、昨今のグローバル化の流れより、近い将来においては日本への留学生に関しても同様の事態が予測され、UIUCの活動は日本の大学のキャリア支援に関わる者で共有すべきであると思われる。

この点に関し、キャリアサポートの担当者が語った実情は極めて興味深いものであった。彼は、世界各地での就労経験を持ち、シンガポールや中国等の就職事情に精通しているものの、世界各国の就職事情にかなう質問に完全に対応する事は事実上不可能であり、現在、様々な対策を工夫しているという。

常時カウンセリングサービスを提供する事に加え、コミュニケーションスキルの向上を目指したセミナー、留学生のみを対象とした就職フェアの開催を行っている。そして、これらに加え、UIUCが上海の事務所を拠点として、各国に存在する同窓会を通じて国外に就職した卒業生のネットワークを積極的に活用しているとの事であった。

4. 2 Student Integrationについて

Student Integrationとは留学生と国内の学生が互いに溶け込むための支援の事である。日本の大学においても、チューター制度、その他有志による留学生支援ボランティア活動等、Student Integrationを連想させる活動は既に行われている。筆者にはStudent Integrationの上手い日本語が見つからないが、留学生支援の今後において、特に重視される重要な概念なのかもしれない。特にUIUCはStudent Integrationが留学生、国内の学生の双方にとって国際的な感覚、リーダーシップの養成する絶好の機会として認識しており、その推進を専門とする職員を設置している。彼ら

より具体的な取り組みに関して詳しい話を聞くことが出来たのでその詳細を以下に説明する。

UIUC は年度の初めに International Week と呼ばれる期間を設けており、そこでは各国の学生コミュニティが一箇所のテントにまとまってブースを設置する。この他、写真コンテスト等の様々なイベントを積極的に開催し、学生同士が国籍を超えて交流する事を推奨しているという。

上述したオリエンテーションの開催と同時期には、オリエンテーションリーダーと呼ばれる学生が親密に配置され新入留学生を支援する。本学のチューター制度に似た部分もあるが、オリエンテーションリーダーとして選ばれるには、2時間のワークショップに14週間参加して資格を取得する必要がある、その資格は就職活動にて自身の豊富な異文化経験を示す証明としても活用できる。オリエンテーションリーダーの構成は留学生、国内の学生が約半数ずつであり、この活動を通じて互いの理解を深め合うことが出来る。

また、今年度より始まっているという Global Leaders Orange and Blue Engagement (GLOBE) という取り組みも興味深い。この取り組みでは、Blue members と呼ばれる先輩学生2名が、ボランティアで5人の新入留学生 Orange members の支援をする。その具体的な活動内容は、Social activity への参加の促進、図書館への案内やサポートサービス等、学内リソースの紹介等である。

Intercultural Training では12回に渡るワークショップを通じ、異文化でのコミュニケーション能力を高める。特に他者の気持ちになる事が重要だという。留学生の為の学内リソースに関する知識も教えられる。異文化を横断する能力やグローバルな知識を高める。これらのワークショップを終えた学生には証書が与えられ、就職活動の際の自己アピールに利用する事も出来る。

4. 3 教職員向けの研修等

UIUC では留学生とのコミュニケーションをスムーズにする為、教職員向けの研修も充実している。一言に留学生と言っても、性別、国籍、更には身分、年齢、地位、社会的地位によってもその背景は異なり、留学生である以前に個性を持つ人間である。そこで、これらの研修では、他者を理解する能力を養う為、異文化コミュニケーションや留学生支援の学内リソースにつ

いての知識を学び、留学生対象の種々の調査結果についても共有し、教職員としての責任と役割を再確認するという。

担当者の説明で特に興味深かったのは、英語を含めたコミュニケーションに関する事項であった。担当者自身の経験によると、スムーズな発音でなくとも専門分野では本を執筆できる程の英語力を備えている者、TOEFL で高スコアを取得していてもタクシーの運転手に行き先さえ伝えられない者が確かに存在しており、言語能力は、発音の良し悪しや英語検定試験のスコアのみでは必ずしも評価できないと注意を喚起していた。

特に、ある特定分野に於いて、その内容に精通しているか否かは言語能力に大きな影響を与え例えており、また、出身国の教育方針によっては読む事と文法にのみ長けているが、話す事は殆どできないといった事例の存在も指摘していた。今後多くの留学生を受け入れる事になる日本の大学においても、そもそもネイティブスピーカーとは何なのかから考え直してみる事も必要であるのかもしれない。

これに加え、例え、英語でコミュニケーションをとることが出来たととしても、例えば挨拶や謝罪、謝礼、要求の仕方や断り方等 (Hello. I am sorry. Please, Thank you.) はその留学生の出身の文化により使用するシチュエーションが大きく異なる事も注意する必要があるとの事であった。しかし、現在 UIUC には100以上の国からの留学生がおり、どの国がどのような文化であるか、その全てを正確に把握する事は現実的ではなく、異なる文化からやってきた人は上述のような点で異なっているという事実を理解し受け入れようとする心がけが重要になる。また、時間に関するルーズさにも差があり、2時にミーティングを始めたい場合等、1時50分に来るように時刻を具体的に伝える等、常に工夫した配慮を怠らず、かつ寛容に対応する事が重要であろうとの指摘であった。

5. 海外留学について

UIUC も、学生の海外留学を推奨しており、毎年2000人程度の学生が海外留学を実現する。学生達が留学する目的は、自分探しに始まり、語学等の学術的な成長、特殊なスキルの取得、インターンシップ、異文化理解力の養成等多岐に渡る。UIUC 側も留学と言う機会を

学生自身の成長の為に最大限生かして欲しいと考えており、オリエンテーションやウェブにより様々な情報を提供している。

5. 1 海外留学に関するオリエンテーション

UIUC では、定期的に First Step Info Session with Study Abroad Advisors と呼ばれるオリエンテーションを開催し、学生が留学を企画するに当たり必要な情報を提供している。筆者を含む研修参加者は、同オリエンテーションの模擬オリエンテーションを受け、担当者と議論した。

オリエンテーションでは、留学先での住宅、留学期間期間、場所、それにかかるコスト等に関連する情報等、学生自身が留学プログラムを検討する際に必要となる情報が中心に紹介された。また、単位交換について等、アカデミックな問題に関連した諸事情についても詳細に説明されており、これらに加え、どの言語で学ぶのか、どのような場所で学ぶのか（田舎が良いのか、都会が良いのか）、いつどの位の期間留学するのか（1年間、セメスター、夏休み、冬休み）等、勉学の環境は目的に応じて様々な選択肢があり得ることも強調されていた。

UIUC には、これらの情報を入力すると、条件に合致したプログラムが羅列表示され、共通したアプリケーションフォームに記入すれば全てのプログラムに一括応募できる WEB システムが構築されており、これには参加者の誰もが驚いていた。

5. 2 UIUC で提供される留学プログラムについて

UIUC の学生として参加できる留学プログラムには 4 種類ある。うち 3 種類は、UIUC ではなく他大学により企画されるものであり、夏休みや冬休みに行く Faculty led program, 交換留学等の Regular term program, インターンシップやボランティアなどの Provider Program が含まれる。これらは、価格も安く現地のサポートも得られるという利点がある一方、UIUC が介入できない為プロセスが複雑である上、限られた数の学生しか行くことが出来ないとの事であった。一方で、Signature program は UIUC により企画されている。

筆者にとって特に興味深かったのは、留学期間中に発生する授業料の扱いである。交換留学の際、学費のバランスの問題は度々指摘される。例えば、米国の大

学の年間授業料は数百万円を超える事も珍しくは無い。仮にその数百万円の授業料を納入する学生が、授業料数十万円の米国外の大学への留学を決意するにはかなりの抵抗があるであろう。しかし、UIUC の場合、留学中の授業料は留学先の額に合わせられる事になっている。つまり、学生にとっては、留学する事が海外経験を積む機会となると同時に学費が安くなる事を意味するため、留学への強いインセンティブとなるであろう。

学生は留学先への出発する前に、指導教員に参加予定の講義が卒業単位数に編入することが出来るか等、留学先での取得単位を考慮した 4 年間の学習計画を相談する。また、指導教員とは別に単位交換に関して承認を行う教員（299 アドバイザー）が設置されており、留学先での講義の内容を確認・承認する。この際の承認にはある程度の柔軟性が認められており、学生が提出する資料に基づき、留学先のある講義の前半とそれとは別の講義の後半を組み合わせ、単位として認める場合もあるという。筆者が知る限り、本学にも単位交換の関係上、卒業時期を遅らせる事を躊躇して留学を断念する学生もいる。その点、UIUC は学生の立場に立った柔軟な対応と単位の質保証を同時実現しており参考としても良いであろう。

5. 3 海外留学に関する危機管理

UIUC には留学中の学生の安全確保を専門とした担当者がおり、今回の研修ではその担当者を行うことが出来た。担当者は、留学生在滞している情勢に精通し、学生への注意喚起を行うと共に、電話による直接の相談にも応じているという。以前には、南アフリカの情勢の悪化で帰国させたこともあるとの事であった。留学中の学生の安全に関しある程度の責任は負うが、留学という行動を過度に制限するのはまた本末転倒である。そこで、UIUC では、統計的なデータに基づき注意喚起（例えば、夜 8 時以降に外に出歩き飲酒した場合、事件に巻き込まれる危険性が○倍になる等）を行い、道義的責任を果たしているとの事であった。

6. 大学間協定

UIUC も世界各国の大学と大学間協定を結んでいる。これに関し、特に参加者の興味を引いたのは、そのどれもが極めて戦略的であった点である。UIUC は携わ

る協定の全てを実りあるものとする為、POISE (Plan, Organize, Initiate, Sustain, Evaluate) と呼ばれるフレームワークを確立し、協定を結び成果を出していく各段階において実践すべき事が徹底されていた。

計画の段階(Plan)では、その協定が組織としてどのような戦略的な目的が存在し得るのか、熟慮した上で計画する事を促している。その次の段階(Organize)では、その目的に向けて、どのような体制で臨むべきか、その協定の評価まで意識した準備の重要性が示されている。実際に協定活動を始める際(Initiate)には、大学内に存在する教員同士のつながりを再確認し、UIUC 側が保有するリソース、協定先が保有するリソースを把握し、相互の潜在的な活動の可能性も意識するべきとしている。その後、協定関係を維持(Sustain)するに当たっては、新しい教員同士の交流や定期的な相手大学への訪問等の重要性を指摘している。最後に協定による業績による評価(Evaluate)であるが、これに関しては協定を通じて得られたアウトプットを数値化し、定期的に厳しく審査しているとの事であった。具体的には、論文の本数や立ち上がった共同研究の数を見える化し、成果を上げていない協定にはその指摘を行い改善を促すとの事であった。

7. おわりに

筆者はこの研修を通じ、国際化において先進的である UIUC の取り組みに関し多くの事を学ぶことが出来た。恐らく他の参加者にとっても同様であろう。

研修自体は UIUC にて開催されたが、参加者が現地に赴く前に2回開催された Pre-departure Virtual

Training では、UIUC が新入留学生に行っている者と同様、渡米し UIUC やプログラムに参加する上で必要な予備知識を事前に提供するだけでなく、参加者が顔を合わせる前に仲間意識の様なものを持たせる効果を上げていた。また、検収が終わった後に開催された Follow-on Virtual Training は同窓会のような雰囲気があり、UIUC で築いたネットワークをさらに強固にする効果もあったであろう。

実は、この研修で筆者が最も興味深いと感じたのは、研修の内容それ自体ではなく Washington DC での Closing Program に向けて与えられた課題である。その課題は、14名の研修参加者全員が UIUC の研修で約10日間に渡り学んだことを5分間の発表にまとめるといった内容であった。特にプレゼンテーションの形式である必要もないとされた。

一人で10日間に学んだ事を5分にまとめる事はそれほど難しい事ではない。しかし、参加者はこの5分のプレゼンテーションの為、滞在先のホテルにて数日に渡りよる11時過ぎまで熱い議論を重ねた。その末に完成した10枚程度のスライドは、参加者が真に学んだ濃い内容である事は言うまでもないが、グループワークでこれ程全員が参加する光景を見たのは筆者の人生では初めての体験であった。この真剣なこの議論を通じて学んだことこそが、この研修の真の価値があったと今でも思われてならない。

最後に、このような貴重な機会を頂いた名古屋米国領事館、内容の濃い研修プログラムを企画、その他の沢山の楽しい活動を企画してくれた GTEC や米国国務省のスタッフの方々には、心よりお礼申し上げたい。



写真5 Closing Program での発表に向けて PPT スライドを夜遅くまで作る参加者



写真6 Closing Program での発表の様子